マックス・プランク歴史研究所について

甚野　尚志

私がマックス・プランク歴史研究所のあるゲッティンゲンに来て、早くも半年近くがたとうとしている。ゲッティンゲンは、人口約十三万人の町で、そのうちに大学生の数が約三万人という典型的なドイツの大学都市だ。この小さな大学都市に、マックス・プランクの名を冠された研究所は三つあるが、その一つが歴史研究所である。ヘルマン・フェーゲ・ヴェークという閑静な住宅街にこの研究所はあるが、その大広間の二階に自分の研究のための場所をもらい、私は毎日、資料を読んでいる。では、この研究所の研究活動についてここで紹介しておこう。

ここには、正規の教授は二人しかいない。一人は中世史のエクスレ教授、そしてもう一人は近代史のフィーアハウス教授である。この二人が両方とも所長の肩書をもち、三年交替で業務遂行のための所長となる。現在、これはエクスレ氏である。この二人のもとに、約20人に及ぶ研究員 Mitarbeiterがいる。彼らは、ここで行なわれている共同研究の中心メンバーであるが、実際には、共同研究の会合は年に数回しか行なわれず、それも公表される論文の内容についての発表といったものであり、もっぱら彼らは個人研究を行なっているといってよい。その点で、月に二回も三回も研究会をもっている京大人文科学研究所のようなところとは、研究所のあり方自体がことなっている。むしろ、この研究所の主要な目的は、ここにある蔵書によって、研究者の便宜をはかることだといってよいだろう。ここには、ヨーロッパ中世史と近代史の主要な史料と研究文献が網羅されており、必要な資料はすぐに手もとに集まるので、ここに滞在すれば、通常よりかなり速く論文を仕上げることができる。ここでは、この蔵書を利用して論文を書くために、一ヶ月から二ヶ月ぐらいの期間滞在するための奨学金を出しており、ヨーロッパ

各地の研究者たちが常時七、八人滞在している。その中の一人であるフランス人の女性研究者が私に語ったところによると、ヨーロッパ中世史にかんして、これ以上の参照できる図書の量を備えた研究所は、ロンドンにあるウォーバーク研究所しかないということだ。日本の研究所の場合だと、ある一定の研究領域について網羅的に図書を集めているところが意外に少ないのではないだろうか。かりに、そのようなところがあったとしても、自分に必要な資料をすべて自分の研究机にもってきて、そこで仕事ができるという形式になっているところはほとんどないような気がする。

マックス・プランク歴史研究所は、1956年に、政府の学術機関であるマックス・プランク協会の傘下の研究所として、ヘルマン・ハインペルの肝入りでゲッティンゲンにつくられた。しかし、マックス・プランク歴史研究所を語るとき、その前身となったカイザー・ヴィルヘルム・ドイツ史研究所を忘れることはできない。これは、1917年にベルリンに創設された研究所で、P・F・ケーアが、初代の、そして唯一の所長であった。この研究所が目的としていたことは、次の四つのことである。

(1)過去のドイツ帝国における教会に関する歴史的な資料の編纂。これは「ゲルマニア・サクラ」というシリーズで刊行されることになった。

(2)皇帝ヴィルヘルムⅠ世の手紙の編纂。

(3)カールⅤ世の手紙の編纂。

(4)ドイツに関係する史料のある外国の文書館の調査。

これらのうち、(1)の「ゲルマニア・サクラ」のシリーズのみが、現在、マックス・プランク歴史研究所で継続されている。このカイザー・ヴィルヘルム・ドイツ史研究所は、第二次大戦の終結とともに消滅するが、それを受けつぐ形でマックス・プランク歴史研究所はつくられた。現在、ここで行なわれている研究活動は、次のものである。

(1)歴史学の書誌である「ダールマン・ヴァイツ・ドイツ史資料」の新たな編纂。

(2)国際的な歴史学の書誌文献における西ドイツの部分の編纂。

(3)1806年にいたるまでのドイツにおける教会に関する歴史的な資料の編纂。これは、「ゲルマニア・サクラ」のシリーズとして刊行されている。

(4)ドイツの「王城」、「王宮」の研究。そして、地域ごとにその資料を作成すること。

(5)中世社会の構造と諸身分の研究。とくに、社会層と社会的現実について。

(6)中世後期の研究。とくに、1378年の大シスマとそれに続く公会議について。

(7)プロト工業化の問題。16－17世紀における農村の家内工業の研究と、近代資本主義の起源について。

(8)家族、親族、労働、労働者の文化についての歴史人類学的な研究。

(9)17世紀から20世紀初頭までの教養層の社会的および文化的な歴史。

(10)1560年から1610年までのフランスの行政官職について。

(11)歴史学におけるコンピューター・プログラムの作成について。

これらから、中世史にかかわるもののうち、「ゲルマニア・サクラ」のシリーズとドイツの「王城」、「王宮」の研究について、詳しく触れておこう。

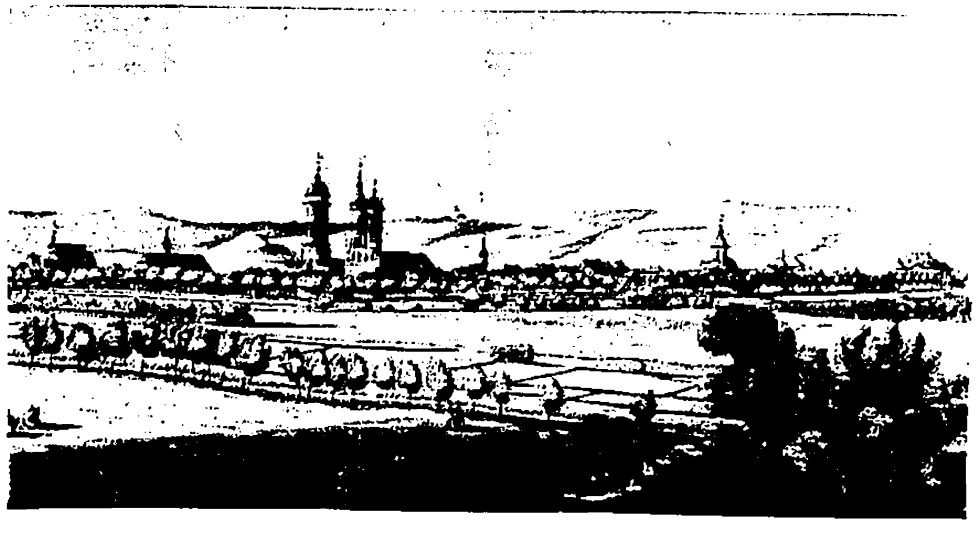
まず、「ゲルマニア・サクラ」のシリーズは、もともと、1908年にＰ・Ｆ・ケーアとＡ・ブラックマンが、ベルリンでの国際歴史学会において、近代的な教会関係史料の編纂の研究計画を提出したのにもとづいている。すでに、16、17世紀の人文主義者たちがこの課題を手がけていたが、18世紀にザンクト・ブラジエン修道院長マンティン・ゲルベルトが、フランスでの「ガリア・クリスティアーナ」を範例にして、ドイツの教会史の集成を個々の修道院、聖堂参事会などについて試みている。これは、ナポレオン戦争によるザンクト・ブラジエン修道院の世俗化、解体とともに中断される。この試みが、Ｐ・Ｆ・ケーアによって、1917年に、カイザー・ヴィルヘルム歴史研究所での研究プロジェクトに加えられた。そこでは、ドイツにおける司教区、聖堂参事会、修道院、宗教

財団、教区、礼拝堂などについての文書館にある史料を整理、編纂することが課題とされ、それは今、「ゲルマニア・サクラ」のシリーズとして刊行されつつある。

次に、ドイツの「王城 (Pfalz)」の研究プロジェクトについて触れておこう。中世の王権の本質的なメルクマールのひとつが、国王が地方を旅して回り、一定の都市に所在しないことであることは、周知のことである。国王は、帝国をめぐるその道々に、一時的な居所となる場所をつくっていたが、それが、「王城」つまりファルツとよばれるものである。それは、中世における国王の支配のしるしであり、国王が不在の間における支配権の連続性を保証するものであった。ファルツには、また、国王のとりまき、側近、引き連れられた従者というもうひとつの意味も、それに結び付いてある。このような二つの意味をもったファルツを、国王の滞在地の一部としてのみ理解してしまうことはできないであろう。シュタウファー朝以前には、すべてのファルツにそれに付属する荘園があり、オットー朝以降のものには、城がそれに結び付いてつくられている。ファルツについての研究は、19世紀にすでに考古学的および建築史的な考察が始まり、20世紀にはいってから、その歴史学的な意味の考察が始まった。メロヴィング朝からシュタウファー朝までの「レグヌム・テウトニクム」の領域内で、国王の滞在地について資料を作成することが、マックス・プランク歴史研究所での研究プロジェクトとして、その創設以来、続けられている。

このような研究活動を行っているマックス・プランク歴史研究所の道向いには、「フランス歴史学ミッション」の建物がある。ここには、常時フランスから派遣されてきた歴史家が滞在して、マックス・プランクでの共同研究に参加したり、講演を行なったりしている。これは、ちなみに、財政的にはマックス・プランク側が支えている。現在は、近代史家のパリス教授が滞在している。

さて最後に、現在の所長であり、私自身の指導教官となってもらっているエクスレ教授の仕事について言及しておこう。彼はもともと、ミュンスター大学でカール・シュミ

ットのもと、中世初期の修道院における人物のプロソグラフィッシュな研究から出発している。そこから彼は、最近のギルド、コンユーラーティオーについての一連の論文を発表していったわけだが、中世における誓約団体の意味を、全体史的な視野からみわたした彼の業績は、その構想の大きさにおいて傑出している。また一方で、「心性史」の分析手法についての論文など、近年の社会史についての種々の方法論的論考も数多くあり、西ドイツの中世史の新たな展開において指導的存在とみなされている。しかし、彼の関心は、中世史のみならず、歴史認識論一般へも広がっている。現在ゲッティンゲン大学では、三学期にわたって、「歴史認識の理論」と題して、中世の唯名論の意味から、近年の「批判的合理主義」と「解釈学」の論争にいたるまでの歴史認識論を跡づけ る講義を行なっている。この問題について、彼は、唯名論→カント→ウェーバーの路線を、再び評価しようとする立場に立っており、この刺激にあふれた授業はいつも超満員となっている。

また、マックス・プランク歴史研究所には、この春まで所長の任にあった中世史の大御所フレッケンシュタイン教授も、退任した今も研究室があって、よく来ており、まさに西ドイツにおける歴史学の拠点といった感がある。外国人研究者が、一定の期間に集中的に成果を上げようとするには、このような研究所は、おそらく最適といってよいようだ。